

ボードレール『悪の華』「反抗」の部を読む ——「北方」の夢——

清水 まさ志

1. はじめに

本稿は、シャルル・ボードレール（1821-1867）¹の詩集『悪の華』の「反抗」の部を、「北方」的な観点から解釈することを目的とする。「反抗」は、初版（1857）において第三部をなし、第二版（1861）においては第五部をなしている。そして、そこに含まれる三詩篇——「聖ペテロの否認」「アベルとカイン」「サタンへの連禱」——はいずれも変わらない。「反抗」の部は、明らかな反キリスト教的内容のため、初版においては、批判をあらかじめかわすため付言を置いていた。実際、初版が司法の訴追を受けたさいも、「聖ペテロの否認」は宗教道徳紊乱の嫌疑をかけられたが、最終的には削除を命じられることはなかった。第二版において初版の付言は削除される。（OC, I, 1075-1076）

「反抗」の部を解釈するさいに、一般的に二通りの解釈方法が試みられてきた。一方は、キリスト教的な観点から読む形而上学的な解釈であり、他方は、革命的な観点から読む社会主義的な解釈である。形而上学的な観点において、「反抗」の部に見られる反キリスト教的な言説は、当時のロマン主義文学に流布したものであり、ホフマンの「ドン・ジュアン」、バイロンの『カイン』、サント＝ブーヴの『悦楽』などの影響が指摘されている²。また、社会主義的な観点からは、神に対する人間の反抗を、ブルジョワ階級に対するプロレタリア階級の反抗と読み替え、プルードンなどの社会主義思想家の著作の影響が指摘されている³。

われわれが「反抗」の部を、「北方」的に読むことを試みる場合、どちらかという形而上学的な解釈に近づく。ボードレールが『1846年のサロン』の第二章「ロマン主義とは何か？」において、ロマン主義とは「現代芸術」（OC, II, 421）であり、「〈北方〉の子供」（OC, II, 421）であると述べる時、ロマン主義を歴史的であると同時に地理的に解釈している。さらに、「苦悩し不安を抱く〈北方〉」（OC, II, 421）と述べ、「北方」の代表的な画家レンブラントは「人間のもろもろの苦悩」（OC, II, 421）を物語ると述べる時、詩人は「北方」の地を神学的な失樂園の世界とみな

¹ ボードレールのテキストは、底本としてプレイヤー版全集を用いた。Charles Baudelaire, *Œuvres complètes*, éditées par Claude Pichois, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. I, 1975, t. II, 1976. 以後略号 OC を用い、巻数とページ数を添えて文中に示す。

² Charles Baudelaire, *Les Fleurs du Mal*, Introduction, relevé de variantes et notes, par Antoine Adam, Éditions Garnier, 1988, p. 418-419.

³ 以下を参照。Dolf Oehler, *Le Spleen contre l'oubli Juin 1848 Baudelaire, Flaubert, Heine, Herzen*, Traduit de l'allemand par Guy Petitdemange avec le concours de Sabine Cornille, Éditions Payot & Rivages, 1996. Pierre Laforgue, « Baudelaire révolutionnaire ? La section *Révolte des Fleurs du Mal* », *Baudelaire dépolitiqué Quatre études sur Les Fleurs du Mal*, Eurédit, 2002, p. 61-79. Keiji Suzuki, « Essai de relecture du *Renielement de saint Pierre* », *L'Année Baudelaire 23*, Baudelaire cent-cinquante ans Actes du colloque de Tokyo du 28 mai 2017, Textes réunis par Yoshikazu Nakaji, Honoré Champion Éditeur, 2020, p. 23-36.

し、その風土は失樂園後を生きる人間の条件であると考えている。ロマン主義を「北方」の文学とする見方は、スタール夫人の『文学論』(1800)以来、ロマン主義時代の通説であったが、われわれのこれまでの研究において、「北方」に神学的な失樂園の地の意義を与えることは、無神論的なスタール夫人も、それを引き継ぐスタンダールも行っていない、ボードレール独自の観点であることを証明してきた⁴。

「反抗」の部には、地理的な自然条件としてのヨーロッパの「北方」を喚起する要素はないが、失樂園後の人間の条件とその条件を与えた神に対する反抗を描く部として読むことで、いわば人間精神の風土としての「北方」性が明らかになるだろう。そして、『悪の華』全体の構成に「北方」という軸が組み込まれていることが明らかになるだろう。

2. 「北方」と想像力

まず、「反抗」に含まれる詩篇を検討する前に、『1846年のサロン』の第二章「ロマン主義とは何か？」における「北方」と想像力の関係について見ておくことにしたい。なぜならば、「反抗」の部を「北方」的に解釈する場合、冒頭の詩篇「聖ペテロの否認」で言及される「行動」と「夢」の問題が、「反抗」の部を「北方」的に読み解く鍵となると考えられるからである。

第二章「ロマン主義とは何か？」において、ボードレールは「北方」と色彩の関係を述べたのち、自然主義的かつ実証的な「南方」芸術に対して、空想的かつ精神的な「北方」芸術の特徴を対比し、「北方」における失樂園後の人間の条件である「苦悩」と想像力の関係を次のように述べる。

それに反して〈南方〉は自然主義者であり、なぜならば自然がそこではあまりに美しく明瞭なので、人間は、望むべきことは何もなく、見るもの以上に創り出すべきより美しいものは何も見出さない。ここでは、野外の芸術、そして数百里もつとのぼれば、アトリエの深い幻想と灰色の地平線に溺れた空想の眼差し。

〈南方〉は、彫刻家が最も繊細な作品においてもそうであるように、ありのままで実証的である。苦悩し不安な〈北方〉は、想像力で心を癒し、そして彫刻するにしても、その彫刻は古典主義的というよりは多くの場合絵画的である。(OC, II, 421)

「南方」の風土では、太陽に照らし出された明瞭な自然がそれ自体で理想的な美であるため、想像力を必要としない。「北方」の風土では、太陽が乏しく霧や靄に包まれた自然は不明瞭で、それ自体で美しくはなく、その不明瞭な自然を背景にして、あるいは室内において、想像力でもって美と理想を思い描く必要がある。ボードレールのロマン主義が、「内面性、精神性、色彩、無限への憧れ」(OC, II, 421)を表現することを目指すとき、「北方」の霧や靄は、物の輪郭をぼかし、

⁴ 清水まさ志『L'inspiration nordique de Baudelaire ボードレール「北方」のインスピレーション』駿河台出版社、2005年。Masashi Shimizu : « La composition du poème « Les Phares » de Baudelaire », *Études de Langue et Littérature Françaises*, no. 88, 2006, p. 59-72.

光を反射させて多様な色彩を産み出し、また明るい外界では見えない内面が写し出され、外界の自然の物質性ではない精神性を表現することになる。そして、「南方」のようにそれ自体として美と理想が得られない状態が、すなわち失樂園後の人間の条件であり、その条件に生きる人間の「苦悩」を、想像力によって思い描く美と理想によって慰めるのである。ここに「北方」と想像力の根本的な関係性がある。

「1859年のサロン」において、「諸能力の女王」(OC, II, 620)として詳細に語られる人間の想像力は、神の創造力と同じものである。失樂園後の人間と想像力の関係を考えると、樂園を追われ有限な世界に生きることを余儀なくされた人間にとって、神の力に通ずる想像力は、無限への扉を開く鍵である。人間の想像力は、有限の地で無限を求め、理想の失われた地で理想を求め人間にとって最大の武器となるものである。しかし、翻ってみれば、想像力によって美と理想を思い描くことは、有限の地へと人間を追放し理想と美に手が届かないように罰した神に対して反抗的な態度と考えられるのではないだろうか。神のようになれるとサタンに唆され、禁じられた果実を食べたイヴと同様の過ちを繰り返すことではないか。

ボードレーは、「テオドール・ド・バンヴィル」(1861)において、現代芸術たるロマン主義が悪魔的傾向を持つことを以下のように述べる。

ベートーヴェンは、人間の内なる空に雲のように堆積した、メランコリーの世界や癒しがたい絶望の世界を揺さぶり始めた。マチューリンは小説において、バイロンは詩において、ポーは詩と分析的小説において、一方はその冗漫さと駄弁において、アルフレッド・ド・ミュッセによってあまりに下手に模倣されたが、他方はいらだたせるほどの簡潔さにおいて、情熱の冒瀆的な部分を見事に表現した。彼らは、人間の心の中に住み着いている隠れたリュシフェールに、光輝き目も眩む光線を投げかけた。私が言いたいのは、現代芸術は本質的に悪魔的な傾向を持っているということだ。そして、人間の地獄的なこの部分は、それを人間は自分自身に説明することを楽しんでいるのだが、日々増大している、まるであたかも悪魔が、肥育人にならって、人工的な方法によってその部分を太らせるのを楽しみ、より美味しい食べ物を自らに準備するために家禽飼育場において人類を辛抱強く太らせているかのように。

(OC, II, 168)

ロマン主義を現代芸術であり、「北方」の息子と定義するとき、「北方」は悪魔的な特質を持つと考えられる。人間のもつこの悪魔的な部分を神との関係で表現するのが「反抗」の部であると考えるとき、「北方」は、失樂園後の世界であり、サタンが住み着いている人間の心の世界であると考えられるだろう。以下、三篇の読解を通して、神のようになろうとして罰せられた人間が、なおも想像力によって神のようになることを夢見る姿をみていこう。

3. 「聖ペテロの否認」

この詩篇において、神は、苦しむ人間たちを見殺しにし、キリストを見殺しにする圧政的な暴

君であり、ペテロは徹底的に人間の側に立つ者、そしてキリストは人間としての条件を分かち合いつつも人間の側に立つことを否定し、暴君である神のいいなりになって処刑される者である。

『聖書』⁵の「マタイによる福音書」16：21-25において、キリストが自らの死と復活を予言した場面の記述はこうである。

それについて、ペテロは、イエスと二人きりになったとき、イエスを咎め始めた。「ああ！主よ！そんなことをしてはいけません。」ペテロは言った。「駄目です、これからもそんなことをしてはなりません。」

イエスは、振り向いて、ペテロに言った。私の前から引き下がれ、サタンよ、あなたは私にとって躓きの種である。なぜならば、あなたは神のものを認めず人間のものを認めている。」

そのとき、イエスは弟子たちに言った。「もしも誰かが私につき従うならば、自らを捨て、十字架を背負い、私の後についてくるように。」

なぜならば、自らの命を救うことを望む者は、それを失うだろう。そして私のために命を失った者は、それを取り戻すだろう。」⁶

このように、キリストは、ペテロが神の意図を理解せず人間的な物の見方しかできないことを咎める。そして、ペテロに向かってサタンと呼びかけるように、それはサタンに与することなのだ。また、ボードレールの「聖ペテロの否認」の詩句31行目「願わくは私は剣を使い、そして剣によって滅びますように！」(OC, I, 122)の典拠となっている「マタイによる福音書」26：51-54における、イエスが逮捕される際の記述はこうである。

同時にイエスと一緒にいた人々の一人が剣を取り、それを抜き、そして大祭司の手下の一人に打ちかかり、耳を切り落とした。

その時イエスは彼に言った。「剣を鞘にしまえ。なぜならば、剣を使うすべての者は、剣によって命を落とすだろう。」

私かわが〈父〉にお願いできず、そして〈父〉が直ちに天使の十二軍団以上を私に与えな

いだろうとでも思っているのか？
〈聖書〉が語ること、物事がそのように行われなければならないということが、いったいどのように実現するだろうか？」⁷

剣で切りかかった者はペテロである。この場合も剣によってイエスの命を助けることは、神を考えず人間の側に立つことであると解釈できるだろう。剣によってイエスの命を守ろうとするこ

⁵ *La Sainte Bible*, traduite sur le latin de la vulgate par Lemaistre de Sacy pour l'Ancien Testament, et par Le P. Lallemand pour le Nouveau Testament, accompagnée de nombreuses notes explicatives par M. l'abbé Delaunay, deuxième édition, 5 tomes, L. Curmer, 1860.

⁶ *Ibid.*, cinquième tome, p. 38.

⁷ *Ibid.*, cinquième tome, p. 63.

とは、先の引用にあるように、自らの命を失うことにつながるからである。そして、イエスが逮捕された後、ペテロがイエスを三度否認する行為も、自らの命を守ろうとする人間的な態度であり、神のことを考えていない行為であると考えられる。それゆえ、その否認を「よくぞやった！」(OC, I, 122) と讃えることは、あくまで人間の側に立つこと、そしてサタンの側に立つことを是認する態度を示していると考えられる。

ボードレールの「聖ペテロの否認」の第 3-4 節で描かれるゲッセマネの祈りは、イエスが神に祈りを捧げ受難の運命を受け入れる場面であるが、詩人の詩句では「広大な人間性 (l'immense Humanité)」(OC, I, 121) の象徴であるイエスが、暴君である神に屈する場面であるといっている。そして、第 5-7 節で描かれる磔刑の場面に、エルサレムに入場し、神殿から商人を追い出し、自らが主となった過去の栄光の日々を「夢見る」イエスの場面を対比することで、圧政的な神に従って人間性を否定したイエスが「後悔」したのではないかという問いを投げかける。

[...] 後悔が

お前の脇腹に槍よりももっと深く入り込まなかったか？ (OC, I, 122)

もしもイエスが磔刑の際に「後悔」を感じたのならば、イエスもまた圧政的な神の仕打ちに対して、人間の側に立つことを認めたのだととらえられるだろう。

このような文脈のなかで、第 29-30 行の詩句「— もちろん、出ていこう、私としては、満足して、/行動が夢の姉妹ではない世界から。」(OC, I, 122) で言及される行動と夢とは何であろうか。プレイアード版の注においては、行動は現実、夢は理想と解釈されている (OC, I, 1080)。この解釈では、理想が実現されない現実に対する非難としてとらえられる。その解釈を敷衍すると、次のようになるだろう。理想が実現できないのは神のせいではないか。神のようになることを夢見て、知識の木の実を食べるといふ行為を行ったが、死をもたらされた人間は、理想の実現を神に禁じられている。そうした神に対する非難であり、反抗である。別な見方をすると、夢が現実ではなく行動が現実であることこそ神が定めたこの世の掟であるとするならば、イエスはまさにあらかじめ見た夢 (= 予言) を行動によって実現したと考えることができる。それに対して、徹底的に人間的なペテロは、どんなことが起きてもキリストと一緒にであると誓った (= 夢見た) にもかかわらず、キリストを三度否認することで行動としてそれを実現できなかった。そのように考えると、夢が行動によってしか実現できないこの世を非難している。「願わくは私は剣を使い、そして剣によって滅びますように！」(31 行目) という、語り手である「私」の言葉も、それを夢見ながら行動には移せなかった後悔を含んでいるのかもしれない。そして、聖ペテロの三度の否認を認める最後の詩句「聖ペテロはイエスを否認した… よくぞやった！」は、行動できない自らを慰めるための捨て台詞と受け取ることもできるのではないだろうか。この詩において描かれるのは、聖ペテロの視点から見た暴君の神とその生贄となったキリストであり、キリストの死によっても贖われない原罪を背負った人間の運命の是認であるだろう。

ボードレールが『1846 年のサロン』において、「北方」の画家の例としてあげたのはレンブラ

ントであった。

ラファエロは、どんなに純粹であろうと、絶えず揺るぎないものを求める物質主義的な精神にすぎない。しかしレンブラントというこのならず者は、夢見させてあの世を見抜く強力な理想主義者である。一方は、真新しく汚れない状態の被造物——アダムとイヴ——を制作し、他方は、われわれの目の前でぼろ着を揺すり、そして人間の苦悩をわれわれに物語る。
(OC, II, 421)

レンブラントは、この世に生きる人間の苦悩と悲惨さを描くことを通して、あの世の理想を夢見させてくれる芸術家である。ボードレーは同美術批評で、レンブラントの絵画の特質を、「壮麗と俗悪 (la pompe et la trivialité)」(OC, II, 449)、そして「劇——自然で生き生きとした劇、すさまじくてメランコリックな劇、しばしば色彩によって表現されるが、絶えず動作によって表現されるもの」(OC, II, 441)にあると述べた。レンブラントは、詩篇「灯台」の第二節にも登場し、そのメダイヨンの図像的な源泉としてレンブラントの版画「病者を癒すキリスト」と「三本の十字架」⁸が挙げられるが、この「聖ペテロの否認」に描かれる神とキリスト、そして聖ペテロの姿も、こうしたレンブラントの絵画の特質である「劇」に通じているのではないだろうか。レンブラントの絵画「聖ペテロの否認」⁹を詩人が見たかどうかは確かめられないが、『悪の華』のディプロマティック版が指摘するように¹⁰、レンブラントの「キリスト昇架」を版画で見た可能性は考えられる。詩篇「聖ペテロの否認」の第5-7節で描かれる十字架にかけられたキリストは、プレイヤー版の注においてオーギュスト・プレオーのキリストの十字架像と較べられているが(OC, I, 1079)、レンブラントの「キリスト昇架」とも較べられるのではないだろうか。人間としての苦しみと悲惨さの真ただ中で、キリストは過去の栄光を「夢見て」「後悔」したのか、あるいは想像力によって「主」であった自らを「夢見て」慰めていたのか。そのキリストの姿に人間の苦悩を重ね合わせ、人間としてのキリストを是認する聖ペテロの「劇」は、夢見る芸術として「北方」的だと言えるだろう。

4. 「アベルとカイン」

詩篇「アベルとカイン」に関しては、アベルをブルジョワ階級、カインをプロレタリア階級として、そこに階級闘争を読み取る解釈が有力である¹¹。特に詩句の第17-18行「アベルの末裔よ、愛して繁殖しろ！/お前の黄金もまた子を生む。」(OC, I, 123)は、資本が利潤を生む経済活動を

⁸ カタログ『レンブラントとレンブラント派—聖書、神話、物語』、2003年9月13日—12月14日、国立西洋美術館、NHK・NHKプロモーション、2003年を参照した。「病人たちを癒すキリスト(100グルデン版画)」はp.113、「三本の十字架」はp.118-119。

⁹ 同カタログ、p.88-89。

¹⁰ Claude Pichois et Jacques Dupont : *L'Atelier de Baudelaire : « Les Fleurs du Mal » Édition diplomatique*, Tome I, Honoré Champion, 2005, p. 146.

¹¹ 注3を参照。特に Dolf Oehler, *Le Spleen contre l'oubli Juin 1848 Baudelaire, Flaubert, Heine, Herzen*, op.cit., p. 75-81.

想起させる。ただし、ジェローム・テロのように形而上学的解釈も社会主義的解釈も退け、人間の生来の空腹感に基づいた「空腹の詩学」を読み取る解釈もある¹²。われわれの「北方」的な観点でいえば、やはり神学的な解釈を軸に読むことにする。

旧約聖書「創世記」4:1-16¹³によれば、カインは弟のアベルを殺した罪により、神より故郷を失った人であり、放浪者を運命づけられた。旧約の記述では、アベルが牧人、カインが農耕者であるのに反し、ボードレールはアベルの末裔を定住者、カインの末裔を遊牧民としたのは、このカインに課せられた放浪の運命を強調するためであると考えられる。詩句第 23-24 行はその運命を述べている。

カインの末裔よ、路上に
追い詰められたお前の家族を連れていけ。(OC, I, 123)

そして、このカインの運命は、『悪の華』全体でみれば、第一部「スプリーンと理想」の詩篇「旅するジプシー」と呼応する。

預言者の部族は燃え上がる瞳で
昨日出発した、子供たちを
背中に担いで運び、あるいは子供たちの旺盛な食欲に
垂れた乳房のいつでも準備万端な宝をゆだねる。

男たちは徒歩で光輝く武器を携えていく
仲間たちが寄り添う荷車に沿って、
空に巡らす眼は鈍い
今はない夢をどんよりと悔いているのだ。(OC, I, 18)

この預言者の部族は、異教徒の神キュベレから愛されているとしても、旧約の神からは呪われたカインの末裔とみなすことができるだろう。「旅するジプシー」の預言者の部族は、いわば近代芸術家の血統を示すものだと考えられるため¹⁴、ジョン・E・ジャクソンのように「アベルとカイン」のカインの末裔に芸術家の血統を見ることは妥当である¹⁵。また、「創世記」4:19-21¹⁶の記述において、カインの子孫であるレメクは、二人の妻を娶り、一方の妻アダの子供の兄ヤバルは遊

¹² Jérôme Thélot, « Abel et Caïn : La faim originaire », *Baudelaire Une alchimie de la douleur Études sur Les Fleurs du Mal*, Textes réunis par Patrick Labarthe, Eurédit, 2003, p. 353-365.

¹³ *La Sainte Bible*, op.cit., premier tome, p. 7-8.

¹⁴ 以下の拙論を参照されたい。清水まさ志「ボードレール『悪の華』「芸術」詩群を読む(2) —ロマン主義と「北方」—」、『筑波大学フランス語・フランス文学論集』第37号、2022年、p. 69-83.

¹⁵ John E. Jackson, *Baudelaire et la sacralité de la poésie*, Genève, Librairie Droz S.A., 2018, p. 29-39.

¹⁶ *La Sainte Bible*, op.cit., premier tome, p. 8.

牧民の先祖に、弟のユバルは音楽家の祖先となることから、カインの血統が、放浪の芸術家の祖先に連なることを確認できる。ボードレールは、散文詩「天職」において、ジプシー音楽家に憧れる四番目の少年を描き、その少年に対して弟のような共感を寄せる（OC, I, 334-335）。それは、詩人が、近代芸術家を放浪の芸術家になぞらえ、カインの末裔とみなしているからであろう。

先に引用した『1846年のサロン』における「北方」と「南方」の定義、ならびに次に引用する「愛に関する慰めの箴言抄」（1846）における「北方」の男と「南方」の男の定義を鑑みると、アベルは「南方」の男、カインは「北方」の男と解釈することが可能ではないだろうか。

〈北方〉の男、霧の中で行方不明になった熱烈な航海士、太陽よりもさらに美しい北極のオーロラを探す人、理想を疲れを知らずに渴望する人よ、冷たい女たちを愛せ。——彼女らをしっかりと愛するのだ、なぜならば、労苦はより大きく過酷であるからであり、そうすれば、無限の青の彼方で開かれる、〈恋愛〉の法廷において、あなたはいつかより多くの名誉を見出すであろう！

〈南方〉の男、明瞭な自然は彼に秘密や神秘に対する好みを与えはしない、——ボルドー、マルセイユ、あるいはイタリアの——軽薄な男よ、あなたには熱烈な女たちで十分でありますように。この動きと活気があなたの自然な領土である、——愉快的領土。（OC, I, 547）

前者はレンブラントと同様に理想主義者であり、後者は自然主義者である。「南方」の男の特徴は、現実世界において満たされていることにある。それは、地上において神や天使に愛され、物質的にも満たされているアベルの末裔の姿と重なる。一方、「北方」の男の特徴は、現実世界において満たされず、理想を求めることにある。それは、地上に置いて神に呪われ、物質的にも満たされないカインの末裔の姿と重なる。そしてその呪われて満たされない運命に対して、あくまで理想を求めて神への反抗を夢見るカインの精神性が、詩篇「アベルとカイン」の第二部において強調される。

ああ！アベルの末裔よ、お前の死体は
煙の出ている土壌を肥やすだろう！

カインの末裔よ、お前の仕事は
十分になされていない。

アベルの末裔よ、これはお前の恥だ。
剣が矛に負けたのだ！

カインの末裔よ、天に上れ、
そして神を地に放り出せ！（OC, I, 123）

このように、カインの末裔に対して、アベルの末裔を殺せと呼びかけるだけでなく、さらに呪った神に対して反抗を呼びかける語り手は、明らかにサタンの口ぶりである。呪われた人間の血統であるカインの末裔とサタンとの連帯を感じさせ、「反抗」の最後の詩篇「サタンへの連禱」へと続く。近代芸術家をカインの末裔とみなすとき、その精神性は、この世において神に禁じられた理想をサタンの力を借りてでも求めようとする態度に通じるであろう。ジョン・E・ジャクソンが指摘するように、この最後の詩節に、バベルの塔を建立して天を目指す人間の野望を読み取ると¹⁷、放浪するカインの末裔が定住してバベルの塔を建設して天を目指し、神を地に放り出すカインの末裔の夢を描いているといえるだろう。しかしこの場合も、聖書「創世記」11:1-9¹⁸の記述によれば、神は人々を散らし言語を混乱させることによってバベルの塔の計画を邪魔する。すなわち、人間が神のようになることを夢見ることは、絶えず高慢の罪として罰せられることになる。そして、詩篇「高慢の罰」に描かれるように、この世において理想と無限を求めて夢見る芸術家もまた、高慢の罰として「行動が夢の姉妹でない」ことを思い知らされ、憂鬱に陥ることになる。

ボードレールの「アベルとカイン」に影響を与えたバイロンの『カイン』において、サタンの口から描かれる神は暴君であり、サタンは人間の味方となってカインを誘惑し、神への反抗を唆し、「死の神秘」¹⁹を知りたがるカインを黄泉の国に連れて行く。これはイヴを唆して禁断の木の実を食べさせたのと同じ行為である。黄泉の国を旅し、死とは何かという「知識」を得て帰ってきたカインは、神への供え物が受け入れられなかったことに不満を唱え、神に対して反抗的な態度を取り、それを非難するアベルを倒して殺してしまう。それによって、アダムやイヴが亡くなる前に現実としての死をこの世にもたらし、主の天使によって放浪の運命を課せられる。サタンに伴われて死を見ようとするバイロンのカインはサタンに対してこう言う。

カイン：私が自分自身を無視して不滅にならなければならないとお前は言った。私はそのことを今まで知らなかった。——しかし、そうならなければならない以上、幸福であろうと不幸であろうと、自らの不滅を先取りすることを学びたい²⁰。

このカインの未知なるものを求める精神性は、「死」とともに「新たなもの」(OC, I, 134)を求める詩篇「旅」の結末を予見させている。

5. 「サタンへの連禱」

「反抗」の最後を飾る詩篇「サタンへの連禱」は、カインの末裔である人間にとってサタンが「養父」(OC, I, 125)であり、この世において神に禁じられた理想と無限を人間に垣間見させて

¹⁷ John E. Jackson, *Baudelaire et la sacralité de la poésie*, op. cit., p. 35.

¹⁸ *La Sainte Bible*, op.cit., premier tome, p. 18-19.

¹⁹ Lord Byron, *Œuvres complètes*, traduites par Benjamin Laroche, sixième édition, troisième série Drames, Victor Lecou, 1847, p. 405.

²⁰ *Ibid.*, p. 404.

くれる存在であることが述べられている²¹。専制的な神に対するサタンと人間のいわば連帯は、サタンと人間に共通する二重の存在様式に由来することが、「笑いの本質について、および一般に造形芸術における滑稽」(1855)において端的に述べられている。サタンの存在様式は、マチュールンの小説『放浪者メルモス』に登場するメルモスの存在様式と同じである。メルモスの笑いに関してボードレーはこう述べる。

そしてこの笑いは、彼の怒りと苦しみの不断の爆発である。彼は、よく私の言うことを理解していただきたいのだが、矛盾した彼の二重の本性の必然的な結果であり、つまり人間と比較して無限に偉大であるが、絶対的な「真」と「正義」と比較すると無限に卑しく劣っているのだ。メルモスは生きる矛盾である。(OC, II, 531)

こうしたサタンの二重性に続いて、人間の笑いに関して次のように述べられる。

笑いは悪魔的である、それゆえ深く人間的である。笑いは人間において、自分自身の優越の観念の結果である。そして、実際、笑いは本質的に人間的であるので、本質的に矛盾的である。すなわち、笑いは同時に無限の偉大さであり無限の悲惨さであることの徴であり、人間が考えることができる〈絶対的存在者〉と比較して無限に悲惨、動物と比較して無限に偉大であるということである。この二つの無限の不断の衝突から笑いが引き出される。(OC, II, 532)

すなわち、ボードレーがここで指摘する二重性を通してサタンと人間の存在様式は重なり、また、この二重の存在様式を分かち合うがゆえに、「人間的」と「悪魔的」は互いに入れ替えることが可能になる。それゆえ、両者にとって神は自らの悲惨さを思い知らせる圧政者である。確かに、サタンは人間に対して無限に偉大で圧政的ではあるが、神に対する無限の悲惨さを分かち合う同類であり、サタンは時に人間に対してその無限に偉大な力によって、神に代わって理想と無限を人間に垣間見させる手助けをする。「サタンへの連禱」は、悲惨な人間に対して悲惨なサタンが救済の(それが一時的なまやかしであるにせよ)手を差し伸べる様を描いている。最後の「祈り」において、サタンの過去と現在、そして人間である「私」がサタンとともに見る夢が描かれる。

サタンよ、お前に栄光と称賛あれ、〈天上〉において、
そこでお前は君臨した、そして〈地獄〉の深みにおいて、
そこで、敗北して、お前は黙って夢見ている！

²¹ ボードレーのサタン像に関しては以下を参照。Paul Bénichou, « La Satan de Baudelaire », *Les Fleurs du Mal*, Actes du colloque de la Sorbonne des 10 et 11 janvier 2003, édités par André Guyaux et Bertrand Marchal, Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, 2003, p. 9-23.

私の魂がいつか、〈知恵〉の木の下、
お前の側で休めますように、その時お前の額に
新しい〈神殿〉のようにその木の小枝が広がるだろう！（OC, I, 125）

サタンが地獄で夢見ていることは、過去の栄光であり、そしてもう一度神に立ち向かうことであらう。サタンもまた「行動が夢の妹でない」ことを思い知っている。そして、人間である「私」が夢見るのも、神によって追放されたエデンの園をサタンとともに取り戻し、神ではなくサタンの神殿、それはつまりところ人間のための神殿を築くことにあるだろう。しかし、善悪を知ることと死を運命づけられた人間にとって、サタンの側に休むことは、死して地獄においてサタンと共に夢見ることかもしれない。

「サタンへの連禱」に描かれるサタンは、ミルトンの『失樂園』²²の影響が大きいことは指摘されている²³。日記「火箭」においても、男性的な美の典型としてミルトンのサタンが挙げられている（OC, I, 658）。ミルトンの『失樂園』との関係で「北方」の神学的な意義を考えると、サタンと「北方」の本質的な関係が理解できる。ミルトンの『失樂園』において、サタンが神に対して反抗を企てた場所、すなわちサタンの領地が「北方」なのである。シャトーブリアンの仏訳で『失樂園』から三か所を引用する。

われわれ [=サタンの軍隊] が北の界限 (les quartiers du nord) を所有している場所 (Pp, 164)

敵 [=サタンの軍隊] は、広大な北方全体 (tout le vaste septentrion) において、われわれの王座に並ぶ彼の王座を建立するつもりで、立ち上がっている。(Pp, 165)

これらの地域を過ぎて、彼らはずいに北の極限 (aux limites du nord) に到着した、そしてサタンは自らの王の滞在地として、丘の上に高く身を置き、山の上に聳える山のように遠くに輝きながら、ダイヤモンドの石切り場と黄金の岩山の中で削られたピラミッドと塔を伴っていた。偉大なルシフェールの宮殿(このようにこの構造は人間の言語において呼ばれている)、それをしばらく後で、神との対等を装いながら、メシアが天を見て宣言された山をまねて、サタンは契約の山 (la montagne d'Alliance) と名付けた。(Pp, 166)

この部分のミルトンの詩句の典拠は、旧約聖書の「イザヤ書」14:12-15にある²⁴。

²² John Milton, *Le Paradis perdu*, Traduction de Chateaubriand, Édition de Robert Ellrodt, Poésie / Gallimard, 1995. 以後略号 Pp を用い、ページ数を添えて文中に示す。

²³ ボードレールにおけるミルトンの影響に関しては以下を参照。Jacques Dupont, « Le Diable baudelairien est-il dans les détails ? », *L'Année Baudelaire 9 / 10, Baudelaire toujours : hommage à Claude Pichois*, Paris, Honoré Champion Éditeur, 2007, p. 123-132.

²⁴ ミルトン (平井正穂訳) 『失樂園』上、岩波文庫、1981年、p. 419-420。

どのようにしてお前は天から落ちたのか、ルシフェール、夜明けにかくも輝いて見えていたお前よ？ どうやってお前は地にひっくり返されたのか、諸国民を災厄で襲ったお前よ？ お前はこう心の中で思った。「私は天に上り、神の星々の上に私の王座を据えるだろう、北の側に (aux côtes de l'Aquilon²⁵)、〈契約〉の山 (la montagne de l'Alliance) の上に腰掛けるだろう、私はもっとも高い密雲の上に身を置くだろう、そして私は神に似た者となるだろう」それにもかかわらずお前は、この栄光から地獄の中に、深淵の最も深い所にまで、突き落とされた²⁶。

そして、ボードレールの「サタンへの連禱」の祈りの前半も、イザヤ書のこの同じ箇所を意識しているだろう。また、ボードレールが、スタール夫人やスタンダールとは異なり、「北方」に神学的な「失樂園」の意義を与えたのも、ミルトンの『失樂園』とともにこの箇所が影響していると想像される。「北方」はサタンの領地となり、悲惨な人間と悲惨なサタンが神に対して反抗を夢見る場所なのだ。

詩篇「サタンへの連禱」の「祈り」と、詩篇「聖ペテロの否認」の内容は、「夢見る (rêver)」と「枝 (rameaux)」という同じ単語を両詩篇で共有することから、内容的に対応していると考えられる。まず、エルサレム入場の栄光の日々を十字架上で「夢見ていた」キリスト（「聖ペテロの否認」）と、天上に君臨していた栄光の日々を地獄で「夢見る」サタン（「サタンへの連禱」）の対比。そしてこの二人が分かち合うのは、暴君である神に屈した「後悔」である。主であろうとしたイエスと神に並ぼうとしたサタンは、そのとき共に「夢が行動の姉妹でない」ことを思い知ったはずである。それに対して剣を取り闘おうとする「聖ペテロの否認」の「私」と、サタンとともに失われた樂園を取り戻そうとする「サタンへの連禱」の「私」は志をひとつにする者である。「聖ペテロの否認」では、キリストはエルサレムに入場する際に「枝」がまかれ（「枝の主日」のいわれ）、エルサレムの神殿から商人を追い出して、神殿を祈りの場所とした。それに対して、「サタンへの連禱」においては、サタンの額から「枝」が広がり「新しい神殿」となる。この両詩篇の間に、詩篇「カインとアベル」において描かれるカインの拒絶された祭壇を挟むことで、聖書の記述を遡り、人間の罪を償うキリストの否認から、死を呼び出したカインを経て、人間の罪と死の原因となったサタンに希望を託すという神への反抗の物語が描かれていると考えられる。サタンが人間に与える救済とは、「死」を「希望」として夢見させることである。

おお お前は、〈死〉、すなわちお前の古くて力強い情婦から、

²⁵ 聖書のこの語は、『悪の花』のなかでたった一度用いられている。無題詩 XXXIX「大きな北風 (aquilon) に助けられた船のように、」(OC, I, 40)。ジャンヌ・デュヴェール詩篇を締めくくるこの無題詩において、この語が用いられたことに関して、「西風 (zéphyr)」の方が適切ではないか、あるいは脚韻のためにそうしたのではないかと考えられてきた (OC, I, 904)。しかし、後半部分において、この女性がサタンに較べられる存在として描かれていることから、イザヤ書の引用箇所がまさにボードレールの脳裏に蘇った可能性が考えられるかもしれない。

²⁶ *La Sainte Bible, op.cit.*, troisième tome, p. 439.

〈希望〉を産み出すだろう、—— 魅力的な狂女を！

おお サタンよ、私の長い悲惨を憐み給え！ (OC, I, 124)

6. おわりに

「反抗」の部を構成するこれら三篇は、社会主義的に解釈すれば、ブルジョワ階級に対するプロレタリア階級の反抗＝革命を描くものと読むことができるが、神学的な解釈によれば、圧政的な神に対して苦しむ人間とサタンの連帯的な反抗の夢と読むことができる。そして「北方」/「南方」の図式に、近代 / 古代という歴史的な意義だけでなく、失樂園後の世界 / 失樂園前の世界という神学的な意義を加えたボードレールにとって、「反抗」の三篇は、失樂園後の世界に生きる人間とその養父となったサタンが、神に反抗し、地上において理想と無限を勝ち取らんと、その悲惨さを想像力によって慰める夢を描いていると言えるだろう。そして、ボードレールが「北方」に神学的な意味を与えたのは、単に恣意的なものではなく、ミルトンの『失樂園』においても参照された旧約聖書のイザヤ書の一節を典拠としているのではないか。一般に、「北方」/「南方」の図式は、スタール夫人の『文学論』において取り上げられ、ロマン主義時代に流布したとされるが、進歩主義思想を信奉し、神学的な解釈を容れないスタール夫人やそれを受け継ぐスタンダールは、「北方」に神学的な意義を与えることをしなかった。しかし、ボードレールは、終生キリスト教的な原罪をその思想の中心に持っていた以上、『失樂園』を訳したシャトーブリアンの影響から「北方」に神学的な意義を付け加えることになったと考えられるのではないだろうか。

(しみず まさし / 鳥取大学准教授)

[本稿は JSPS 科研費 (課題番号 18K00456) による研究成果の一部である。]